平成28年度千葉県ボランティア参加促進事業

2020ちばおもてなし隊セカンドステージ

―育て！パラリンピックボランティア―

事 業 報 告 書

2017. 3

千　葉　県

特定非営利活動法人 生涯学習応援団ちば

□目　次

はじめに …… 1
千葉県環境生活部県民生活・文化課

2020ちばおもてなし隊セカンドステージを終えて …… 2
特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

平成28年度千葉県ボランティア参加促進事業
「2020ちばおもてなし隊セカンドステージ」の実施結果

事業目的 …… 3
事業実施結果 …… 3
1　コース１ …… 3
2　コース２ …… 6
3　コース３ …… 7
4　全体交流会 …… 7
提案集　2020オリンピック・パラリンピックでの
ボランティア活動による参画について …… 10
全体交流会に参画して（学生団体おりがみ） …… 12

写真集１　セカンドステージ活動の様子 …… 13

座談会「2020ちばおもてなし隊の今後に向けて」 …… 15

セカンドステージ参加者の声 …… 23

写真集２　セカンドステージ活動の様子 …… 29

表紙の絵は、全体交流会のポスター等の制作のため、
千葉県立幕張総合高等学校美術部の清宮麻由さんに描いていただきました。

はじめに ― 主催者あいさつ

千葉県環境生活部　県民生活・文化課

皆さんこんにちは。千葉県県民生活文化課　副課長の松井です。本日は多くの皆さんに御参加いただき、ありがとうございます。主催者を代表して一言御挨拶申し上げます。

この「2020ちばおもてなし隊セカンドステージの全体交流会」は、「千葉県ボランティア参加促進事業」の１つとして、「特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば」の御協力により実施するものす。

御承知のように2020年の東京オリンピックではレスリングなど３競技、パラリンピックではゴールボールなど４競技が幕張メッセで、また、一宮町の釣ケ崎海岸でサーフィンが開催されることになり、合わせて８競技が千葉県で開催されます。これは、東京都以外では最も多い競技数となります。

そして大会の期間中には、多くの選手や観客の人たちが、世界中からこの千葉県にやってきます。また、大会前にも、様々なスポーツの国際大会や事前キャンプ、数々の文化プログラムなども県内各地で行われる予定ですので、それらに向けて、県を挙げておもてなしやボランティア活動の気運を高め、準備することが求められています。

今日は、高校生の皆さんが、これまでのおもてなし活動を通じて考えた、オリンピック・パラリンピックに向けた提案やアイディアを報告し、それをもとに明石先生はじめ関係者の皆さんの御協力をいただきながら、高校生、大学生や地域の方々などを交えて、グループワークを行います。

ぜひ、今日の交流会を通じ、いろいろ感じたことや学んだことを、友達や仲間の人たちにも広めながら、皆さんのアイディアを実現するため、身近でできることから、実際の活動や行動に結び付けていただきたいと思います。

この場には、すでに、地域で活動をしている人もいらっしゃると思いますが、まだ経験したことのない人も、今日のこの機会が、はじめの一歩を踏む出すためのきっかけや後押しになればと心から願っています。

それでは、皆さん、今日はどうか楽しく有意義な時間を過ごしてください。

（平成29年１月14日開催の全体交流会での主催者あいさつを掲載しました。）

2020ちばおもてなし隊セカンドステージを終えて

特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

2020ちばおもてなし隊の事業は、平成26年度に千葉県ボランティア参加促進事業の受託事業としてスタートして以来、本年度で３年目となりました。今年度は、昨年７月以降、おもてなし隊の活動にコース１から３を設定し、様々な取組みを行ってきました。

コース１ではオリンピック・パラリンピックについての学習や、関係者からの聞取りを通じて、高校生など若い皆さんが2020年オリンピック・パラリンピックにどの様に関わるのかを考えてきました。

コース２では、リオデジャネイロ・パラリンピックに出場する日本選手団の出国時に、成田空港で高校生たちが激励、応援などを行い、2020年に向けたおもてなし活動の実践体験を行いました。

コース３では、2020年に千葉県でパラリンピックの４競技が開催されることを踏まえ、中学生、高校生たちに千葉で開催される競技を中心に体験会を開催いたしました。

また、本年１月14日に開催した全体交流会は、以上の成果を踏まえ、高校生たちが東京2020オリンピック・パラリンピックにどのように関わるのかを考え提案し、それについて様々な年代の方が交流し、ディスカッションをする中で実現可能なものに磨き上げようといたしました。

この結果、セカンドステージを通しての参加校は19校となり、参加者も延べ430人となりました。ご参加いただいた皆様、本事業実施にあたり様々な形でご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

事業実施結果の詳細は、報告書に記載してあります。これまで、私たちはおもてなし活動について、世代間の繋がりと継続性を課題の一つとして参りましたが、本年度、学生団体おりがみとの連携や、全体交流会にボランティア活動を行っているシニアの皆さんのご参加をいただくことなどで、新たな展開の方向性を感じたところです。

また、事業全体を通して中学生、高校生たちの考える力、企画する力、行動する力を実感し、意欲的な提言・アイディアが多く出されました。今後は、このようなアイディア、提言をいかに実現するかが問われます。

さらに、関係者による座談会では、高校生たちがボランティア活動へ参加する方策に議論が及び、安心して参加できる仕組みづくりや、持続するボランティア活動の仕組みづくりに貴重な示唆を頂きました。

平成29年度は、2020ちばおもてなし隊セカンドステージの成果を踏まえ、2020東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動やおもてなし活動に寄与するとともに、若者を中心としたボランティア活動への参加機運の一層の醸成を図るよう、多くの皆様のご支援・ご協力を頂きながら事業を進める所存です。

今後ともよろしくお願いいたします。

平成28年度千葉県ボランティア参加促進事業
「2020ちばおもてなし隊セカンドステージ」の実施結果

事業の目的

東京2020年オリンピック・パラリンピックでは、千葉県でオリンピック４種目、パラリンピック４種目の競技が開催される。

本年度の2020ちばおもてなし隊活動では、パラリンピックに焦点を当て、４年後にボランティア活動の主力世代となる高校生・大学生がパラリンピックについて学び、競技者と交流し、競技を体験し、ボランティア活動の企画運営について研究・討議することで、パラリンピックでのボランティアについて関心・興味・参加意欲を広げ、ボランティア育成に寄与することを目指した。

特に、本年度の事業では、高校生たちがパラリンピックのボランティア活動について自ら企画する中で、特別支援学校の生徒達との連携の在り方について課題として取り組むこととした。

事業実施にあたっては、３つのコースと全体交流会などで構成した。

事業実施結果

１　コース１「パラリンピックのボランティアについて考え行動する」について

パラリンピックの歴史や､千葉県で開催される競技についての学習､パラリンピックでのボランティア活動の重要性・意義、活動内容などについてのヒヤリング等を通じて、千葉県で開催されるパラリンピックでのボランティア活動について検討した。特に、高校生たちが特別支援学校の生徒達と連携したボランティア活動の在り方なども課題として、グループ討議と発表会を行った。

(1) 第１回目　「パラリンピックについて知ろう」

第１回目では、参加した高校生などが、様々な視点からオリンピック・パラリンピックについての講義を通じて、ボランティアについて考えてもらうきっかけづくりとした。

日　　時　平成28年７月16日（土）14時～ 16時20分

会　　場　ちば国際コンベンションビューロー会議室

実施内容

総合司会：明石要一氏（千葉大学名誉教授、千葉敬愛短期大学学長）

あいさつ及び説明　「東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた千葉県の動き」

千葉県総合企画部 東京オリンピック・パラリンピック推進課

講義１「障がい者とスポーツ－千葉盲学校での体験から」

講師：津田亘彦氏（千葉県立千葉女子高校教諭）

・ご自身の千葉盲学校での経験などを踏まえた講義を行った。

・講義の中で、視覚障がい者に対する「手引き」の実践体験を行った。

講義２「ロンドンパラリンピックに出場して」

講師：渡邉紫帆氏（ロンドンパラリンピックに陸上競技で出場、千葉盲学校卒業）

・2012年ロンドンパラリンピックに出場した際の現地での受け入れ、ボランティアの様子などを話していただいた。

講義３「ロンドンオリンピック・パラリンピックのボランティア活動と大学生の取組み」

講師：都築則彦氏（学生団体おりがみ代表、千葉大学理学部３年生）

・オリンピックの理念、2012年ロンドンオリンピックでのボランティア活動の様子、学生団体おりがみの取組みなどについての講義を行った。

参 加 者

総数　28名

高校生・中学生など　　15名（内引率４名）

（昭和学院秀英中学校・高等学校、千葉聖心高等学校、桜林高等学校）

講師・主催者・事務局等　　13名

（千葉県、ちば国際コンベンションビューロー、大学生、生涯学習応援団ちば）

(2) 第２回目　「パラリンピックでのボランティア活動について知ろう」

オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動についての重要性・意義・具体的な活動内容などについての講義などを通じてグループでオリンピック・パラリンピックボランティアの方向付けを行った。

また、第３回目に向け、グループ内での意見交換を通して今後の検討の方向性、参加者による課題整理などの討議を行った。

日　　時　平成28年８月９日（火）14時～ 16時15分

会　　場　ちば国際コンベンションビューロー会議室

実施内容

総合司会：明石要一氏

助　　言：明石要一氏、大久保利宏氏（千葉県スポーツコンシェルジュ）、渡邉紫帆氏、都築則彦氏、津田亘彦氏

ファシリテーター：「学生団体おりがみ」参加の大学生

講義１「オリンピック・パラリンピック概論」

講師：都築則彦氏

・オリンピック、パラリンピックの理念、学生団体おりがみの取組みなどについての講義を行った。

講義２「東京2020オリンピック・パラリンピックボランティアについて」

講師：千葉県環境生活部県民生活・文化課

・ロンドン2012大会時のボランティアの概要及び東京2020大会の都市ボランティアについて講義を行った。

○講義終了後、６グループに分かれ、ＫＪ法によりグループ討議を行った。討議進行にあたっては、学生団体おりがみの大学生が各グループにファシリテーターとして参加し、討議の進行をサポートした。

○グループ討議のテーマ設定は次の通り。

・メインテーマ

東京2020オリンピック・パラリンピックに、ボランティア活動やその他の活動などを含めてどのように関わるか。そのために今後何をしていきたいか。

・必須のテーマ

「千葉を考える」

千葉の良さや魅力、千葉の課題などを抽出し、それを、オリンピック・パラリンピックの中でどのように千葉をアピールし、課題を解決するのかを考える。

・テーマ設定にあたっては「障がいを持つ同年代の若者たちとの協力・協働をどうしたいか」の視点を含める。

○討議結果について各グループから中間発表を行った。

参 加 者

総数　49名

高校生、中学生、大学生など　　31名（内引率４名）

（昭和学院秀英中学校・高等学校、千葉聖心高等学校、桜林高等学校、千葉敬愛短期大学）

講師・主催者・事務局等　　18名

（千葉県、ちば国際コンベンションビューロー、学生団体おりがみ、生涯学習応援団ちば）

(3) 第３回目　「私たちが考えるパラリンピックとの関わり」

１回目、２回目の結果を踏まえ、各グループでパラリンピックのボランティアについて何を行うのかを企画検討し、その結果について発表会を行った。

日　　時　平成28年８月26日（金）14時～ 16時20分

会　　場　千葉大学教育学部２号館201教室

実施内容

総合司会：明石要一氏

助　　言：明石要一氏、大久保利宏氏、渡邉紫帆氏

講義「千葉の魅力」

講師：明石要一氏

・千葉県の持つ特徴、魅力などについて様々な視点から講義を行った。

○講義終了後、第２回目で行ったグループ討議をまとめ、各グループから発表を行った。

○発表の主なテーマは次の通りであった。

・千葉県の魅力を紹介するための千葉県ツアー

・ホームステイを通した千葉県の魅力発信

・千葉の交通機関をより良くするために

・学んでいることを活かし、親子が安心して過ごせるおもてなし

・成田空港が立地していることを活かしたおもてなしやボランティア活動

・千葉の魅力（自然環境、食、歴史など）を活かした千葉のアピール

参 加 者

総数　38名

高校生、中学生、大学生など　　27名（内引率４名）
（昭和学院秀英中学校・高等学校、千葉聖心高等学校、桜林高等学校、千葉敬愛短期大学）
講師・主催者・事務局等　　11名
（千葉県、ちば国際コンベンションビューロー、生涯学習応援団ちば）

２　コース２「リオデジャネイロ・パラリンピック出場者と交流しよう」について

リオデジャネイロで開催されたパラリンピック参加選手団の出国時に成田空港で激励、応援などを行い、2020年に向けたおもてなし・ボランティア活動の実践体験を行った。

実施にあたっては、成田空港株式会社、日本航空株式会社及び全日本空輸株式会社のご支援・ご協力並びに日本パラリンピック委員会のご指導をいただいた。

(1)　水泳競技選手団の激励

日　　時　平成28年８月21日（日）　８時10分～９時50分

実施内容

○成田空港第２ターミナル国際線出国ロビーＪＡＬチェックインカウンター周辺で高校生たちが横断幕の掲出、声掛けなどにより水泳競技選手たちを激励した。

○横断幕は、千葉黎明高校書道部生徒が作成し、その後の激励でも使用した。

参 加 者

総数　21名　（千葉黎明高等学校有志生徒、千葉聖心高等学校ボランティア部生徒）

(2)　陸上競技選手団の激励

日　　時　平成28年８月29日（月）　８時～８時50分

実施内容

○成田空港第１ターミナル南ウイング国際線出国ロビーＡＮＡチェックインカウンター周辺で、参加の高校生たちが横断幕の掲出、ハンドベル演奏などで陸上競技選手たちを激励した。

○ハンドベル演奏は植草学園大学附属高等学校吹奏楽部生徒、演奏曲は「負けないで」、「栄光の架橋」の２曲

参 加 者

総数　31名

（植草学園大学付属高等学校吹奏楽部生徒、千葉聖心高等学校ボランティア部生徒、日出学園高等学校陸上競技部生徒）

(3)　ウィルチェアーラグビー及びトライアスロン選手団の激励

日　　時　平成28年８月31日（水）　８時～８時50分

実施内容

○成田空港第２ターミナル国際線出国ロビーＪＡＬチェックインカウンター周辺で高校生たちが横断幕の掲出などによりウィルチェアーラグビー選手及びトライアスロン選手たちを激励し、選手たちとの記念撮影や握手などで交流した。

参 加 者

総数　28名 （千葉黎明高等学校有志生徒）

3　コース３「パラリンピック競技の体験会」について

希望校を募り、オリンピック、パラリンピックの概要説明や、ボランティアについての講話を行うとともに、千葉県で開催されるパラリンピック競技種目（シッティングバレーボール、ゴールボール）の体験会を開催した。

(1)　千葉市立稲毛高等学校附属中学校での体験会実施

日　　時　平成28年７月28日（木）　午前８時30分～午前10時５分
会　　場　千葉市立稲毛高等学校附属中学校体育館
参 加 者　稲毛高校附属中学校２年生の夏期講習の一環として実施し、中学２年生80人が参加
指 導 者　千葉県スポーツコンシェルジュマネージャー　大久保利宏氏

(2)　平成28年度第２回千葉県青少年赤十字西部地区（生徒）協議会での体験会実施

日　　時　平成28年12月14日（水）12：30 ～ 15：30
会　　場　中央学院高校（我孫子市）体育館
参 加 者
中央学院高校、市立柏高校、市立船橋高校、県立船橋高校、県立船橋豊富高校、県立清水高校、県立柏の葉高校のＪＲＣ参加生徒
中央学院高校バレー部員　　合計70名以上が参加
指 導 者
千葉県スポーツコンシェルジュマネージャー　大久保利宏氏
千葉県立千葉女子高等学校教諭　津田亘彦氏

関連事項

平成28年９月３日のパラスポーツフェスタ（主催：千葉県、千葉市、ＮＨＫ千葉放送局　会場：千葉ポートアリーナ）で、コース１に参加した千葉聖心高校、桜林高校の生徒12名が当事業の運営補助のボランティア活動に参加。

当日、高校生たちは大学生や一般のボランティアの方と一緒に会場設営・撤去、パラリンピック競技体験のサポートなどを実施した。

4　全体交流会について

全体交流会では、各コースに参加した生徒・学校に協力頂き、高校生たちによるオリンピック・パラリンピック参画へのアイディア、提案をもとに、地域で活躍する皆さんや大学生たちが高校生たちと討議し、世代間の交流を通じてその提案を実現可能なものにしようとすることを目指した。

これにより東京2020オリンピック・パラリンピックで千葉県ならではのおもてなし活動の推進を

目指し、ボランティア活動への参加意欲の醸成を図った。
全体交流会の企画及び運営にあたっては、学生団体おりがみに特別協力団体として参画していただき実施した。

(1)　事前準備など

ア　全体交流会開催にあたっての後援について

全体交流会開催にあたっては、事業への後援をいただくため、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、千葉県高等学校長協会、公益財団法人千葉県青少年協会及び千葉県青少年団体連絡協議会に後援申請を行い、事業後援をしていただいた。

イ　広報資料の作成と配布

告知用ポスター 1,000枚、同チラシ23,000枚を作成し、高校、大学、その他多くの関係機関等へ平成28年11月下旬に配布し、参加を呼びかけた。

ポスター及びチラシの原画を千葉県立幕張総合高等学校美術部の清宮麻由さんに作成していただいた。

ウ　関係団体との協力

ちば国際コンベンションビューロー千葉県国際交流センターのご協力をいただき、同センターに通訳ボランティアとして登録中の賛助会員（500名強）にチラシ及び参加ご案内用文書を発送。

エ　企画会議等の開催

全体交流会の参加者募集、事業内容、運営方法などを協議するため、関係者による企画会議を２回開催した。

第１回目　平成28年12月９日　18時15分～　（会場）生涯学習応援団ちば事務所
第２回目　平成28年12月27日　18時～　　（会場）生涯学習応援団ちば事務所

企画会議のほか、適宜担当レベルによる打合せ会を開催した。

オ　報道機関へのお知らせ

全体交流会の開催については、平成29年１月10日に千葉県庁記者クラブを通じて情報提供を行った。

(2)　全体交流会開催結果

日　　時　平成29年１月14日（土）　午後１時～午後４時30分
会　　場　千葉市生涯学習センター　大研修室（３階）
参 加 者
総数　85人
高校生・大学生など　55名（内引率６名）
（昭和秀英中学・高校、千葉黎明高校、植草学園高校、津田沼高校、幕張総合高校、千葉女子高校、東金高校）
事前申込みによる参加　11名
助言者　３名
千葉県その他関係団体　８名
生涯学習応援団ちば　８名

実施内容

助言者	明石要一氏、大久保利宏氏、渡邊紫帆氏
司会・進行	県立幕張総合高等学校放送委員会生徒
会の記録（録画）	県立幕張総合高等学校放送委員会生徒
ガイダンス	学生団体おりがみメンバー
ファシリテーター	学生団体おりがみメンバー

1）開会式・ムービー上映

○主催者（県民生活・文化課）、生涯学習応援団ちば及び学生団体おりがみによるあいさつ

○あいさつ時に千葉黎明高等学校生徒が成田空港でのパラリンピック出場選手激励で使用した横断幕を掲げた

○オープニングムービーの上映

・ＢＧＭに植草学園大学附属高等学校生徒によるハンドベル演奏を使用

○助言者の明石要一氏及び渡邊紫帆氏によるご挨拶と激励

○学生団体おりがみによる全体の流れの紹介

2）アイスブレーキング

3）報告会

○事前に頂いた提案に基づき、昭和秀英中学校・高等学校及び津田沼高等学校生徒が発表

○学生団体おりがみから参加できなかった桜林高校及び敬愛短期大学の提案紹介

4）ディスカッション

○ディスカッションのための情報提供として千葉県オリンピック・パラリンピック推進課より東京2020オリンピック・パラリンピックの概要の説明があり、第16回世界女子ソフトボール選手権大会組織委員会より2018年の大会概要の説明が行われた。

○７班に分かれてグループ討議を行った。

○各班は、高校生や中学生に加え、地域でボランティア活動などに参加している成人、ファシリテーターとして学生団体おりがみのメンバーが加わった。

5）発表

○１班から順次、各班のディスカッションシートによりタイトル、目的、ターゲット、概要などを説明した。

○各班の提案内容は、別表提案集に記載した。

6）閉会式

提案集

東京2020オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動による参画について（全体交流会）

班	提案のテーマ	主　な　提　案　内　容
1	千葉県魅力アピールツアー	対象:自分たちの身近な人 目的：成田から東京に着くまでを活かして千葉の魅力を知ってもらう 半日コース、１日コースなどを設定し県内の観光スポットなどを巡る
2	ホームステイを通して、日本文化を外国人にどう伝えるか	対象:ホームステイ受け入れの日本人、利用する外国人 目的:自分たちが日本文化を知り、ホームステイを通して日本文化を外国人に伝える ・地域の歴史に住民が興味を持ち詳しくなる ・祭りなどのイベントを通して地域独自の文化を知る ・地域の魅力を案内するマップ作り、文科系イベントへの参加 ・ホームステイ先の家に日本文化・地域文化を体験できる工夫を
3	千葉マップ	対象:各学校 目的:千葉を知る 千葉の各学校に協力してもらい、地区ごとにマップを作り、それを一つのマップや本にまとめる
4	私達が作る！The ローカルおもてなしツアー	対象:外国人、サーフィン会場、地元全体 目的:おもてなし　外房の自然、海、星、茂原の七夕祭り、幕張、花火、ホームステイなど 様々な魅力を紹介し、それを活かすようなツアーやマップ作り やることツアーを作る
5	千葉県の魅力を発信しよう～魅力マップ作戦～	対象:千葉県民→世界の人（周りの人） 目的:自分たち（千葉県民）が千葉の良さを知る。それを分かりやすく回り（日本中、世界中）に伝え、知ってもらう。 展示会、食事会の開催。伝統芸の紹介と体験。名産品。アニメ。 自分たちの興味あることを調べ発信。 魅力一覧を製作し、発信。
6	Sending Beautiful Legacy to the Future	対象:高校生、中学生、小学生 目的:未来に素晴らしいものを残す 知ること、聞くこと（経験者へのインタビュー）、行動すること（パラ競技体験、地域の清掃）、考えること（基本的な教材と自分たちが使える教材）が一つ一つでなくすべて大事なこと
7	ひまわりで平和のおもてなし「ひまわりプロジェクト」	目的:オリンピック、パラリンピックを通して平和を伝える 対象:世界中の人 ひまわりを植えたり、種を飛ばすイベントなどでつながりを広げ、ひまわりを広げる オリ・パラ開催時には選手に花のプレゼント、空港で種のプレゼント、会場周辺に花文字でおもてなし

東京2020オリンピック・パラリンピックでのボランティア活動による参画について（事前提案）

番号	提案のテーマ	主　な　提　案　内　容
1	街のバリアフリー化サポート	・開催前に駅、会場周辺の道のりや交通機関について、障がい者と一緒に歩いてバリアフリーの度合いを調査してまとめて、市や県に提出。 ・開催期間中は、サポートが必要な場所にボランティアとして待機し、手助けする。
2	千葉の交通機関をよりよくするために	駅（トイレ）の案内を分かりやすくし、視覚障がい者への配慮、ホームの安全性の確保、鉄道を利用しやすくするための各国の言語でのパンフレット作りなどを行う。
3	ホームステイ	宿泊施設の不足解消及び異文化交流としてのホームステイを受入れる。
4	学んでいることを活かし、親子が安心して過ごせるおもてなし	保育ルーム（大会会場内）で、母親のサポート（おむつ替えのスペースの確保、授乳の手伝い、手遊びや読み聞かせなど）を、安全性を考慮して行う。
5	「地域力」をつないでおもてなし	・訪れた人がほかの人に話したくなるようなイベント等を行う。 ・選手村やオリンピック選手などが訪れた場所を残しておく。 ・多くの外国語表示を増やす。
6	千葉の地域清掃活動	オリンピック・パラリンピックを機会に、街を美化するボランティア活動を行う。
7	地区対抗パラスポーツ大会	地区対抗で、若者から高齢者まで交えたチームを作り、千葉で行われるパラリンピック種目を中心としたスポーツ大会を開催する。
8	高校生が行うオリパラ教育	高校生がオリンピックやパラリンピックの理念・歴史などを学び、その成果で中学生、小学生などにオリンピック・パラリンピック教育を行ったり、幼児向け絵本を作る。
9	日本文化の魅力アピール	高校生などが感じる歌舞伎や落語など日本文化の魅力を、英語などを使って海外から訪れる人々にアピールする。
10	千葉県ツアー	成田空港スタートで、①歴史系、②親子向け、③アクティビティ系のツアーを考え案内する。

全体交流会に参画して（事業結果の分析）

学生団体おりがみ

「中高生が地域の大人や大学生とタッグを組むことによって、自分たちのアイデアが本当に実現する」という本イベントの目的は達成できたのではないかと思っています。実際に、出たアイデアをいくつか来年度に実施することを予定しています。では、面白いアイデアが沢山出た、本イベントの醍醐味であるディスカッションについて分析したいと思います。

もともと、この“2020ちばおもてなし隊”というイベントは、中高生が日頃の活動を活かして東京2020に向けて地元の千葉でできることを考えて実行しよう、という内容となっていました。今回は今まで中高生が自分たちで行ってきたことを活かして、地域の大人と大学生が話し合いに加勢したらどんなことが起こるかを実際に体験してもらいました。アンケートには「自分の意見を言っても、拾ってくれたのでよかった（昭和秀英３年）」や、「自分では思いつかないアイデアや意見が聞けた（幕張総合１年）」、「周りの人の考えたアイデアに自分がどんどんつっこんでいけることが嬉しく感じた（昭和秀英２年）」などの意見がありました。地域の方が中高生のやりたいことに率先してアドバイスをしていたことが、彼らの大きな自信となり発想力をより高めたのだと思います。また、年齢の近い私たち大学生がファシリテーターとなり彼らの意見を促すことでより多くの面白いアイデアが出たと感じています。やはり世代間の交流として意見を交えたことに大きな意味があることを実感しました。

そして、“千葉でできること”を考えるという面では、「千葉県には自分が思っていたよりも多くの魅力があることを知ることができた（昭和秀英１年）」や、「自分たちが千葉県をわかっていなければおもてなしをすることはできないから、改めて知ることができてよかった（千葉女子２年）」、「千葉県がさらに良いところになってほしいと思った（千葉黎明３年）」などの意見があがった。班にいた大人がどんな仕事をしていて、どんなことがこれからの千葉の課題になるのかを聞いている班が多く、どの班も各々違った角度から千葉を知ることができたと思います。したがって、班によって千葉に対する考え方も異なったものになり、発表時のアイデアは班員の個性や知識が色濃く混ざった魅力的なものになっていました。普段は“自分の住んでいる街”くらいにしか思っていない千葉でも、周りの人の声を聞くことで“千葉にこうなってほしい！”というビジョンを持てるようになります。このディスカッションによって、参加した中高生たちはこれから自分たちが何をしたいか、何をするべきかがはっきりわかったでしょう。そして、地域の大人や大学生が彼らの考えたことを実現する手助けをする協力関係を築き始めることもできたと思っています。

最後に、このような教育イベントがオリンピック・パラリンピックにどう影響していくかを考えます。

現在の中高生は、2020年にオリンピック・パラリンピックに大いに関われる大学生となります。そんな社会の中でも一番フレッシュで身動きの取りやすい若者が積極的にオリンピック・パラリンピックに関わることで、世界で生きていくための力を身につけることができます。ですが、まだオリンピック・パラリンピックの知識が少なく、東京2020に向けての意識が低い中高生が東京に限らずたくさんいます。そんな彼らには、まずは自分の周りでできることを探して実践していく、そういった行動力や理解力が必要になると思っています。したがって今回のように、自分たちの住む地元で何ができるかを考えること、そして自分たちの力が微力でなく影響力があるということを伝えてあげることが大切です。私たちはオリンピック教育としてこのようなイベントをこれからも行っていきたいと思っています。

写真集１　セカンドステージ活動の様子

コース１「パラリンピックのボランティアについて考え行動する」

第１回目　参加者に語り掛ける総合司会の明石氏

第２回目　講義する学生団体おりがみ　都築氏

第２回目　グループ討議の様子

第２回目　グループ討議結果の中間発表

第３回目　グループ討議結果の発表

コース２「リオデジャネイロ・パラリンピック出場選手と交流しよう」

８月21日　水泳競技選手団の激励

８月29日　陸上競技選手団の激励

８月31日　トライアスロン出場選手団とともに

コース３「パラリンピック競技の体験会」

７月28日　稲毛高校付属中学校で

12月14日　中央学院高校で

12月14日　中央学院高校で

12月14日　中央学院高校で

（全体交流会の写真はp29に掲載しました）

座談会「2020ちばおもてなし隊の今後に向けて」

出席者（発言順、敬称略）

大久保　利宏　　千葉県スポーツコンシェルジュ　マネージャー、前千葉県立幕張総合高等学校長
都築　則彦　　学生団体おりがみ代表、千葉大学理学部３年生
香取　美海　　学生団体おりがみメンバー、千葉大学理学部1年生
津田　亘彦　　千葉県立千葉女子高等学校教諭、千葉県高等学校体育連盟理事長
明石　要一　　千葉敬愛短期大学学長、千葉大学名誉教授、文部科学省中央教育審議会委員
安田　一夫　　千葉県立津田沼高等学校長、千葉県高等学校文化連盟会長
藤江　智子　　昭和学院秀英高等学校教諭、同校生徒会顧問
高橋　　健　　特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば　理事・事務局長

■2020ちばおもてなし隊セカンドステージ全体交流会を終えて

大久保　「2020ちばおもてなし隊セカンドステージ　座談会」の進行を務めさせていただきます。最初に今年度のおもてなし隊、特に１月に開催された全体交流会を中心に皆さんのお話を伺います。学生団体おりがみの皆さんは、今年度からおもてなし隊の活動に参加してくれましたが、振り返って高校生たちと一緒にやってよかったこと、物足りなかったことから話してください。

都築　高校生と話してみて思ったことですが、僕たちが思っていた以上に高校生が自分の意見を持ってディスカッションができるというところにまず衝撃を受けました。最初は、大学生がリードして丁寧に教えていかなくてはいけないかなと思っていましたが、期待していた以上にディスカッションに積極的に参加して、これやりたい、あれやりたいというのを持って帰っていく高校生が多かったということを、去年夏のおもてなし隊の時に感じました。それがきっかけで全体交流会にも関わるようになりました。物足りなかったことは、ディスカッションで終わってしまって行動に結び付けることがなかなかできていないというところです。夏考えたものをブラッシュアップしてそれをいつ実行するのかということを本格的に考えていかなくてはいけないと、最近強く感じています。

都築則彦さん、香取美海さん

大久保　ディスカッションに終始したということですが、おりがみは具体的な活動としてどんなことをやっているのか、香取さん、どうでしょう。

香取　私たちはオリンピック・パラリンピックに向けて活動しているんですけど、オリンピック・パラリンピックについて知るということと、あとは自分たちの中で考えて実践する、実行するという二つのフェーズで今活動しています。ディスカッションや勉強会で知ることや、ヒヤリングでオリンピアン、パラリンピアンの方々にお話を聞くなどインプットして、アウトプットとして体験会やイベントを開いて実行する実践するということをやっています。

大久保　そういう活動のところに高校生が入っていくということは可能ですか？

香取　はい、可能です。今までも大学生以外に大人の方、中学校、小学校の方とか、体験会に参加してくださる方の年代はとても幅広いです。

大久保　今年１月に全体交流会を千葉市生涯学習センターで開きましたが、津田先生には生徒引率で来ていただきました。あの交流会を見て大学生と高校生が一緒にやっていくということも含めて感じたことを話していただければと思います。

津田　今お二人が話されたことと全く一緒です。高校生は大学生にリードをしていただければどんどんアイディアが出てくるし、ディスカッション自体が楽しくなってくることは感じました。でも、ディスカッションで終わってしまっているということもおっしゃる通りです。千葉の魅力を発信しなければ、千葉のことを知らなければ、というところまでは行っていても、その次がパタッとなくなってしまう。

津田亘彦さん

大久保　明石先生は、今回、大学生を入れてよかったとおっしゃっていました。さすが大学生ということをおっしゃっていましたが、先生から見て全体交流会はいかがだったでしょうか。

明石　私のグループでは、高校生も素晴らしかったんですけれど、高校生の持っているものを引き出す役割、流行りの言葉でいえばファシリテーターとまではいかないけれど、ファシリテーター的なことを大学生がやっていた。そういう意味では高校生、大学生のミックス集団がよかった。今回非常にヒントをもらいましたね。それと同時に、高校生も大学生もあまりにも千葉を知らない。香取さんが言ったように「知る」というキーワードは大事。キリがないかもしれませんが、ある程度の知るというガイドラインぐらいは作ってみたい。専門家までいかなくても、知ることについての情報量が少なすぎる。もう一つは、大学生や私たちがやらなくてはいけないのは「繋ぐ」ということ。2020年までの３年半を見据えて頑張っている集団をたくさん押さえながら繋ぐということは応援団ちばの役割かなとも思います。繋ぐことをしておいて参画するという仕掛けがこれから求められていると感じました。これが実行にもつながることだと思います。

大久保　次に安田先生から交流会の感想や、津田沼高校の生徒の感想をお聞かせください。

安田　終わった時にうちの生徒にご苦労様の意味もかねて、どうだったって聞いたんです。そうすると、参加した二人とも、ちょっと高揚しながら今日はとても楽しかった、すごく勉強になりましたと言ってました。私自身の感想では、生徒たちが各学校の周辺で自慢できる場所のマップを作るほうが、ありきたりのマップよりいいというアイディアを出してくれましたが、ああいう発言を聞くと、とてもいいな、頼もしいなと感じました。ただ、これを行動に移すとなるとどうするのかな、ということも思いました。私の仕事の関係で考えると、いいことだとは思いますが、どうしても高校生は学校にとらわれている。一個人として何かのボランティアに参加するのではなく、学校に所属して、学校に案内が来たら先生と一緒に何かしようという感覚。ある意味、しょうがないことですが、そこを何とかしないとこれからの行動につなげていけないのかな、ということも思いました。

大久保　それでは、藤江先生。昭和秀英の生徒たちは、昨年度は世界陸上の選手達と文化交流をし、また本年度もコース１や全体交流会に参加しているわけですが、生徒たちの様子はどうでした。

藤江　今回、最初のうち生徒たちはディスカッションばかりでいいのだろうかと思っていたようですが、回を重ねるごとに大学生や大人の数が増えてきました。特に1月の交流会はそうだったと思います。そうすると、自分たちが考えたアイディア、特にバリアフリーについて何とかしたいと考えていたものが実現できるのではないかと思うようになってきました。私としても、これを何とか形にしたいと思っています。去年の夏の時点では、千葉の魅力発信のためのツアーとかホームステイを活用し

藤江智子さん

た文化交流のようなものを考えていましたが、終わってから、それだけでいいのか、もっとやることがあるんじゃないかと考えたようです。その結果生徒たちが考えたのがバリアフリーの提案です。

明石　藤江先生が言われたバリアフリーに関することは実行するということですよね。昭和学院秀英高校はもうプラニングはあるんですよね。海浜幕張駅からメッセまでのバリアフリーの点検をしながら案内板を作るとか、距離をどう明示するのかとか。そういう中高生の良さを出してプラニングをして実行してくれると、それが一つのケーススタディになって、今後の高校生、中学生にそういうことをやればいいのかというモデルになるかと思ってます。昭和秀英は中高一貫校ですから、その良さをうんと発揮してほしいですね。

■高校生と大学生の連携について
－安心して参加できる仕組みづくりときっかけづくり－

大久保　次に、高校生と大学生の連携を話題にしましょう。今、安田先生の話にあったように、高校生はどうしても学校の外に目が向かない、いいイベントであってもなかなか生徒に伝わらないというところがあると思いますが、おりがみの取組みがどうやったら伝わるようになるのかな。

明石　大久保さんと同じことですが、おりがみは千葉大中心だけれども様々な大学から参加してますよね。その高校生バージョンができるのかどうかということをちょっと話してもらえれば。おりがみ立ち上げの時の言い出しっぺは千葉大でしたけれど、それがどう波及して広がったのか。今のおりがみには大学はどのくらい入っているのかな？

都築　おりがみは今、23大学53名です。

大久保　おりがみの○○高校ブランチとか△△高校ブランチとか、そういう夢を実現するためにはどういうことが考えられるか。ちょっと難しいかもしれないけれど。香取さん、どうですか？

香取　出来るかどうかといったら出来ると思うんです。それは、高校生や中学生のやる気や熱意で大人を動かせると思うからです。勉強もできるし、活動もできるということで、やるべきことをしっかりやりながら、こういうことをやってみたいという熱意があれば、誰かついてきてくれるかなと思っています。加えて、私たちは、ある意味自由出来て、ある意味完璧な後ろ盾を持っているっていう、最強のところにいることに、大学に入ってから気づきました。

明石　今のは面白いキーワードですね。自由にできて最強の後ろ盾があるといったでしょ。その後ろ盾とは何をイメージしているのかな？

香取　今までの活動で支えて下さった方、例えば先生ですとか、あとはイベントに参加して作った繋がりのある大学生とか、そういうちょっとでも繋がったことのある方じゃないかなと思っています。おもてなし隊のような後ろ盾も貴重です。

大久保　その最強の後ろ盾をもって、例えば、ある事業が千葉大学主催で、おりがみが企画運営して、千葉大学が色々とバックアップして、それを後ろ盾に高校に案内が行くと、その案内が各生徒に届くかどうか、ある意味では学校長さんの意識かなと思いますが、どうでしょうか、安田先生。

安田　ある意味では、そうだと思いますが、やはり現状ではオリンピック・パラリンピックに対しての意識とか温度が高くないですよね、まだまだ。大学生の皆さんと違って、高校の場合には別の問題

がある。要は、高校生が未成年なので、保護者がついていて、責任の問題がある。高校が案内をしたからうちの子は行ったけれど、怪我したけれども高校はどうしてくれるんですか、という問題がある。私もそのようなことを保護者から言われれば「ウーン」ということになります。そこをクリアしないと高校におけるおりがみのような団体、活動というのはなかなか実現しないだろうと思ってしまいます。

大久保　今あったように、オリンピック・パラリンピックに対する関心が低いということは、私も非常に感じていますが、津田先生は高校生のスポーツを統括する高体連の理事長としてどうお考えですか？

津田　色々ありますが、私のことからお話ししますと、私は今、千葉女子高校の剣道部の顧問です。去年は、剣道部員を連れて千葉大のシッティングバレーのイベントに参加し、また、おりがみの皆さんを千葉女子高校に呼んで全校生徒の前で講演して頂いています。だから部活動単位、学校単位でオリパラに関わりを持つことをきっかけにすれば、どんどんできるなと思っています。簡単にいえば女子高の剣道部の顧問が、剣道以外の分野にも活動範囲を広めて行動すればすぐできるなと思っているので、最初のとっかかりはそのパターンもいけるんじゃないんでしょうか。

大久保　ところで、高体連の本体である全国高等学校体育連盟ではオリンピック・パラリンピックを盛り上げようという動きはどうですか？高校生にもオリンピック・パラリンピックを機会にスポーツを盛り上げようということにはならないですか？

津田　トップのアスリートについては、ものすごくやっていますし、盛り上がっています。その他はなかなかという感じですが。

明石　剣道はオリンピック種目に入っていないですよね。でも別のパラリンピック種目のほうに剣道の有志たちが参画するというのは面白い提案だと思います。日本の場合、例えば剣道一筋とか野球一筋とかの傾向が強い。有名なアメリカのマイケル・ジョーダンはバスケットをやり野球をやりですよね。そういう意味での多様な体験をできるということでいかないといけない。例えば車いすバスケットにも興味関心を持っていただき、部活動というキーワードでやるとうまくいくのではないでしょうか。責任の問題で校長先生や顧問は苦労することはあるけれど、部活動では日常の信頼関係がありますから。部活動から入っていくというのは面白いかもしれない。

明石要一さん

津田　子どもたちは、例えばシッティングバレーなど色々なことをやるとものすごく楽しみますし、違う種目をいっぱいやりたいんです。そこでネックになってくるのは顧問の意識だと思います。

安田　オリンピック・パラリンピックを盛り上げようとするときに、学校の先生がいつも引率、というところをクリアしないと続かない。基本は保護者の同意を得た自主的な参加として自分の子どもたちが繋がってボランティアをするという風にやる。この図式を描かないといけないと思います。

明石　おっしゃる通りで、とっかかりが部活動で、ちょっと走ってもらって、部活動のバックにいる保護者にお願いをして、家族単位で参加することが私は妥当な進め方だと思う。持続するようにしなくてはいけない。一回二回は学校にお願いして行ってくれると思いますが。持続するボランティアの仕組みづくり、これはやはり社会体育とか、生涯学習でやらなくちゃいけないことかな。

大久保　この前の全体交流会では、参加した高校生の中に制服を着ないでリラックスした格好で参加した生徒がいましたよね。そこで、学校へのメッセージということになりますが、こちらはちゃんと

した団体だし、少なくともこちらに来てくれれば私たちはきちんと面倒を見ますよ、保険にも入っていますよと。だから「気楽に生徒を出してください」と学校にメッセージを送るというのはあるんでしょうか。

明石　それは校長さんが助かる。とっかかりとして柔らかいボランティア部や色々な部にお願いする。それと同時に生徒が単独でも安心して参加できる仕組み作り、保護者が安心できる仕組み作りにしていかないといけない。都築さん、何かいい知恵はない？

都築　安心できる仕組み作り、というのはなかなか難しいことだと思います。高校生たちが大学生たちと関わりを持ちたいというのは僕の中ではすごくありました。ただ、私たちのようにサークル活動をやっている大学生が高校生に対して声を掛けるというは、すごくやりにくいです。そういう時にどこが後ろ盾になって頂けるのかという部分が悩むところです。例えば、おりがみは毎週火曜日に千葉大にミーティングやるから高校生の皆さん来ませんかというのは少し難しいかもしれないです。そこで、例えば県の事業でやり、大学生も来るから高校生の皆さんも来ませんかみたいな感じで公的なところが声を掛けて頂けると大学生もすごくやりやすい。そうなったら、高校生はあれやりたい、これやりたいと言って口コミで広がる、何かそういったような流れが出来てきたらいいなと思います。

大久保　それはこのＮＰＯ生涯学習応援団ちばの役割でもある。

明石　生涯学習応援団ちばも、最強かどうかは分からないけれど、後ろ盾であって、繋ぐ役割。それがこのＮＰＯの役割ね。

安田　それと、保護者を巻き込むとき、高Ｐ連（注：千葉県高等学校ＰＴＡ連合会の略）には声をかけるといいと思います。とにかく千葉で関東大会をやる、全国大会をやるとかになるとすごいエネルギーを発揮します。来た方々のおもてなしだと言って、チーバ君の入ったポロシャツを着て帽子をかぶって要所要所に立って案内している。ボランティアやおもてなしを保護者にやっていただかなくても、高校生はそのお子さんたちですよね。一緒になってやってもらうっていうところは、大事かなって。

明石　それはいいね。理解してもらう。高Ｐ連から自分のお子さんに伝えてもらえばいいんだから。

大久保　それから、大学生はオリンピック・パラリンピックに向かって関心が低いのかな？気持ちの高まりのような点で。ひょっとしたら国民全体でまだまだ低いかもしれないけれど。

都築　その通りだと思いますが、それはオリンピック・パラリンピックに興味がないから温度が低い、全然知らないから低いということだと思っています。オリンピック・パラリンピックでこんなことが出来る、あんなことが出来るということを、僕たちがある程度具体的に語れるようになってきているので、そのことを言うと面白そうと関わってくる大学生ってすごく多いです。温度は可能性がなくて低いのではなくて火がついてないから低いんだと思います。だから、そういう機会をどんどん増やして火をつけていくっていうのが大事じゃないかと思います。

明石　今、都築さんがいいこと言った。キーワードは「オリパラであんなこと、こんなことできるよ」というメッセージを出していく。いいキーワードだ。

■千葉を知る、ということについて

大久保　次に先ほど話題になった「千葉を知る」についてお話しをしましょう。今回貰ったアイディアの中では「千葉県で暮らしてみる」、「千葉マップ」、「ローカルおもてなしツアー」、「千葉県の魅力発信」など結構千葉の良さを発信しようというものが数多くありました。そして生徒の中からは、そのために千葉県のことを知らなくてはいけないという声がある。安田先生、先生は千葉学の監修をされているそうですが、千葉を知るというのはどうやればいいんでしょうか？

安田　生徒の受け売りじゃありませんが、まずは身近なところをちゃんと知っているのかどうか、ということで、その辺りが怪しいですよね。本校の生徒が当日、千葉には魅力がないと言ったんです。私は聞いていてがっかりしました。その生徒が言うには、千葉にずっと住んでいますが、取り立てて外の人に対して何が魅力だろうということが解らなくてそういう言い方をしたと。だからやはり身近なところから魅力発見、魅力の掘り起こしをすることが非常に大事だと思います。千葉学は元々環境問題も含めて、身の回りのことから子どもたちに植え付けよう、知ってもらおうということから始まっていたと思うので、千葉を知るということは大賛成ですね。

安田一夫さん

大久保　香取さん、千葉の良さについて、大人と若い人の受け止めの違いって何かありますか。世代間の感覚の違いです。また、日本人と外国人から見た魅力の違いについて何か感じることなどありますか？

香取　若い人が感じる千葉の魅力と大人の人が感じる魅力は、そう変わらないかなと思います。それは、この前のディスカッションの時に思いました。どの班でも、大人の方が自分は千葉でこんな仕事をしていて、こういうところがいいと思っていて、そう思わないか、という話しをされていました。私たち大学生も高校生に千葉のいいところが一杯あって、という話しを沢山しました。ただ、班ごとに大人の話が違うので、班によって千葉に対する考え方も異なり、発表時のアイディアは班員の個性や知識が色濃く混ざった魅力的なものでした。普段は“自分の住んでいる街”くらいにしか思っていない千葉でも、周りの人の声を聞くことで“千葉にこうなってほしい！”というビジョンを持てるようになったと思います。

大久保　ということは、おりがみが作るちば100選があったとすると、専門家が関わる千葉学での魅力と大体一致するんでしょうか。若者の100選と専門家の100選が合っていると嬉しいですよね。

明石　先ほど話題に出た、高校生が自分の周りを知りたいというのがキーワードだと思います。知っていると思いますが、千葉県の小学校３年生の副読本があります。あれをもう一度読んでもらって自分の小学校区、中学校区の魅力、実は３年の時に習っていますが、それを復習して、情報発信して、大久保先生がおっしゃるように高校生、大学生が自分の町から魅力の一点ずつを、例えば54の市町村だったら54集めるとかすると千葉54選が出てくるんじゃないでしょうか。

大久保　千葉を知るっていうことは、いろんな角度からやらなくちゃいけないですね。

■バリアフリーについて

大久保　もう一つはバリアフリー。先ほど藤江先生もお話しされたように街のバリアフリー化サポートとか、千葉の交通機関をさらに良くすることが大事というのがあります。私はこれは比較的やさしいような気がする。実際に改善したりするのはＪＲや市であったりしますが、それに提案することができると思いますね。津田先生、いかがでしょう、例えば、勤務経験のある盲学校の生徒や先生が望むサインのあり方はありますか？盲学校にいる人じゃないと分からないものが多いとと思いますが。

津田　私、盲学校には３年間しかいませんでしたが、多分、一般の方より視覚障がい者の通る道などが気になるのではないかと思います。点字ブロックの上に自転車が止めてあったら危ないからどかそうと行動に移すのは関係者以外はやらないと思うんです。この点について、より多くの方に意識を持ってもらうには、例えば、中学生が授業の中で自分たちの学校の周りのバリアフリーなどを調べて発表

すれば、ものすごい数のデータが集まるんじゃないかという話しが前回のディスカッションの中で出ました。私はそういう意味では小中学生にやってもらうというのはあるのかなと思っています。

藤江　以前、渡邊紫帆さんとお話ししたんですが、その時、幕張の街は歩道にはちゃんと点字ブロックがあるけれど歩道橋の上はブロックがなくてわかりにくいとおっしゃってました。また、本校の生徒が、歩道橋の階段の手すりが夏になるととても熱くて大変ではないか、と言っていましたので、渡邊さんに伺ったらその通りだそうです。こういうのもなかなか気が付かない点でした。

大久保　秀英の生徒さんはよく気が付きましたね。いずれにしても、視覚障がい者の白杖のことや、それを使った動作のことなども含め、万国共通の視覚障がい者に対するルール、基礎的な知識はやはり学校教育でやらなくてはいけないですよね。

安田　おっしゃる通りだと思いますね。それでちゃんと行動できるようにしてほしい。

■提案するということについて

大久保利宏さん

大久保　私の最近の経験ですが、ある国の自転車チームを県内のホテルに案内しました。ところがそこでは、シャワーをはじめ、バリアフリー、電気ポットの使い方の案内用の標記などが全然国際標準に達していません。こういうところは多くあると思いますが、そういうホテルや接客する側の人たちに、こういう風にしたらいい、ということを若者目線で提案していくっていうことができるなと思っています。

都築　若者が動くとなったら、動くことに対して強いモチベーションを持たないとなかなか動くことができないと思います。ただ、今おっしゃったようなことについて、余り考えていない若者が多いと思います。そこで、一つの手がかりとしては、パラスポーツみたいに楽しんで入り口を知っていくのかなというのを最近特に感じています。

香取　そうですね、現状すら知らない若者がいるっていうことは問題ですし、不便さを自分で体験するしかないんじゃないかなって思います。その気持ちを知って、という感じです。

大久保　そこで、来年はアクションをして、具体的に提案などをしていこうと思っています。藤江先生がお話しになったように、何校かの生徒が一緒に参加して海浜幕張駅からメッセまでの道路の点検をやる、他の学校の生徒は案内用のDVDを作る、他の高校が案内マップを作るとか、色々アイディアがあります。そこで得た結果を行政やホテル、交通機関などに提案、発信していくようにしたいと考えています。

都築　行政などに提案して際に、僕は提案したものが本当に採択されるという経験とかがなくて、言ってみても、ああいい提案だね、若者らしい意見だねということでいつも終わってしまっているような感じがしています。だから提言するようなものに対するやりがいなどを僕はあまり感じることができていないんです。色々と提言していくと採択されるものなんですか。

大久保　例えば、この座談会を含むおもてなし隊の事業は、応援団ちばで業務を受託しているわけです。これを報告書の形でこの話を県に伝えていきます。すると、県でも、ああ、こういった人はこういうことを言っているんだと分かってもらえる。それで県がボランティアのオペレーションを作るときに、ここで話しているようなことをちゃんと頭の中に入れてやっていかないとだめだ、ということ

で反映される。直接反映するというのは難しいかもしれないけど。
都築　今のお話しだと、反映されるという経験を大学生や高校生たちが持てたら、私たちが社会を変えることができるかもしれない、ということになり、実現できればすごいいい経験になると思います。
明石　それが一番大事なこと。こんな例がある。60歳を超えたシニアの方々が半年間勉強する。それで発表会があるわけです。発表会の時には港区役所、浦安市役所の担当者などが来ている。いい発表には札を上げる、昔スター誕生とかあったじゃない。ある事務所が誰だれがほしいとかいう。同じような形でグループでこういうことをやりたい、オリパラでこれやりたいとか。そういうところにみんなが集まって、例えば半年間やってくれて、上から目線でお願いするんじゃなくて、各行政の方がいいアイディアにはお願いするとかって、そういう発想に行政が変えていかなきゃ動かない。そうしたら、高校生、大学生動きますよ、知恵を働かせて。それでだめならだめでいい。聞く耳を持ってほしいと行政の方に言いたい。

■今後のおもてなし活動について

大久保　最後に、これまでの話しを受けて、応援団ちばから来年度の取組みの方向などについてはどうでしょう。
高橋　来年度は、一つには全体交流会などでの提案を受ける形で、昭和秀英の生徒の皆さんからいただいた「街のバリアフリーサポート」に具体的に取組んでいきたい。それもできるだけ地域の多くの学校を巻き込み、また、盲学校や特別支援学校との連携をうまく作り出せればいいなと考えています。もう一つは千葉の情報発信に関わることです。当面、2018年に女子ソフトボールの世界選手権大会が千葉県内の４つの市で開催されます。まずはそのあたりを視野に、今回の全体交流会での提案を踏まえたものができればと思います。あとは､おりがみの皆さんが蓄積したオリンピック･パラリンピックの知識を高校生などの教育プログラムに活用できればと思いました。
大久保　藤江先生、いかがですか。
藤江　生徒たちもやる気がありますので、ぜひ実現したいと思います。私たちの学校は、美浜区のいくつかの高校と生徒会の交流をやっています。こうした学校にも声をかけ、また、言語の問題なんかでは、お隣の神田外語大学との連携もできたらと思います。
大久保　分かりました。来年度の課題は行政に届く、届かせる、実現させる。こうしたことを着実にやっていって、しかもできることは実践に移して、ということでやっていきましょう。長時間ご協力ありがとうございました。

（本座談会は、平成29年２月23日、特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば事務所で開催したものです。）

セカンドステージ参加者の声

2020ちばおもてなし隊セカンドステージコース１参加者から（敬愛短期大学、桜林高等学校）

○　私はセカンドステージコース１の第３回目（８月26日）に参加しました。「オリンピックで選手をどうおもてなしするのか」ということを考えてみて、学んでいる保育を生かせたらいいなと思いました。私たちは選手の方々が安心して試合ができるようなおもてなしが大切だと思いました。

○　ぜひこのテーマについてまた講義があったら参加させて頂きたいと思いました。

○　実際にパラリンピックに出場したことがある選手からの話しを聞けたことで、オリンピックとの相違点や、実はこんなところが大変だということがわかって、見方がだんだん変わってきたのを感じます。

○　今回、千葉の交通機関について自分たちで話し合い、考え、改善点及び改善方法を考えてみて、まだまだ沢山やることがあるのだと痛感しました。私もボランティアとして参加したいです。

○　参加して、（千葉の交通機関に）こんなにも改善点があることを知って、これから良くなるように自分にできることを考えて、千葉を良くしたいと思いました。

2020ちばおもてなし隊セカンドステージコース３　パラスポーツ体験会に参加して（７月28日開催）

千葉市立稲毛高校　教頭　黒川康宏

リオデジャネイロオリンピックの開会を間近に控えた７月、本校附属中学校で、大久保利宏先生を講師にパラスポーツの体験授業を行った。ほとんどの生徒が2020年の東京オリンピックでは千葉市で３競技が行われることを知っていたが､パラリンピックで４競技が開催されることは知らなかった。大久保先生と私で千葉市の開催競技であるゴールボール、チェアフェンシングのデモンストレーションを行った後、シッティングバレーを全員が体験した。最初に円陣パスにチャレンジしたが、座った姿勢では移動が難しい上に高さのコントロールができないため、非常に正確性が要求されることがわかった。続いてサーブに挑んだが、遠くまでボールを打てず全員四苦八苦であった。当日はアメリカからの短期留学生も加わったが、彼らは学校でシッティングバレーを体験したそうだ。障害者スポーツへのアプローチについてアメリカとの差を感じた。

初めての体験に、わいわいがやがや楽しそうに取り組んでいたが、大久保先生からのパラリンピアのお話しに対し新しい発見があった生徒が多かったようだ。「する･見る･支える･知る」というスポーツの関わりのうち、知ることの重要さを感じた講習であった。そして生徒達は2020年に向けて見る、支えるに大きな関心を持ったようだ。

生徒の感想 ①

私はこの講習を受けるまでパラリンピックに関する知識や興味は全然ありませんでした。しかし、今日パラリンピックの種目の一種である「シッティングバレーボール」を体験することによって、私が感じていたよりもパラリンピックは身近なものなんだなと思いました。まず「目が見えない」ということを体験しているのを見て、とても怖いんだろうなと思いました。そのためには音を出してサポートするサポーターの支えが必要なことも分かりました。先生がおっしゃっていたブラインドサッカーはまだ見たことがないけれど、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが始まったらぜひ見てみようと思います。実際に私も「シッティングバレー」を体験してみました。座って行うことによって、動きにくく、ボールをキャッチするのに、おもうように動くことができませんでした。ただ「スポーツ」ということに何の変わりはなく、見ていてもやっていてもすごく楽しかったです。私達でも「目をかくす」ことや「座る」ことなど簡単にパラリンピック種目を行うことができるとわかりました。また他の競技も体験したいです。最後に先生がお話をして下さった「2020年東京オリンピックについて」私も感じたことがあります。まずボランティアについてです。英語を一生懸命勉強して、私もボランティアに参加したいなとすごく思いました。とても貴重ですばらしい体験ができそうだなと思います。また、今年のオリンピックをテレビで見る上でも、オリンピックとパラリンピックは何も変わらない同じスポーツであり、選手は金メダルをとるために競い合っているんだということをきちんと頭に入れるようにしたいと思います。パラリンピックの面白さがわかるような講習でした。ありがとうございました。

生徒の感想 ②

私が夏期講習「パラリンピック種目を体験する」を受けてとても大変だと思いました。今回教えてくださった大久保先生はパラリンピックはだいたいが、健康だったが途中から事故や病気などで障害を持つことになってしまった人たちが出場していると言っていました。私達は足に故障を持つ人がすわりながら行うバレーボールを行いました。こしを浮かせてはいけないというルール以外、普通のバレーボールとほぼ同じでした。最初に５人組になってパスをしましたが、体が動かなかったです。うでを伸ばしてどうにかしようとしていました。これが、トスの練習になったときはすごかったです。ボールはあちらこちらに行ってしまうのに自分は動けない。とても大変でした。この競技を本当にやっているのかと思うとびっくりします。私は今までパラリンピックに興味を持っていませんでした。勝手にレベルが低いと、オリンピックのほうが楽しそうだと思っていました。しかし今回の講習を受けてそれがまったくの勘違いだとわかりました。たとえ障害が体にあったとしても、自分の輝ける競技を見つけて、それで勝利を求めて戦っている人がいました。人が一生けん命にやっているスポーツに見ててつまらない物はないと思います。リオがとても楽しみです。

生徒の感想 ③

私は2020年のパラリンピックがまさかあの幕張メッセで行われるとは思ってもいませんでした。講師の方からこういう話しを聞いてぜひ４年後観戦したいと思いました。私が、この種目体験の中で学んだことは３つあります。１つ目はパラリンピックでは盲目の方や難聴の方がいらっしゃるので、

種目が始まるときは観戦者も「しん」と静まりかえらなければいけないことです。観戦する人も競技者にこうして協力することで、より良い一体感が出て良いなと思いました。２つ目はシッティングバレーボールを行ったとき、大久保さんが「パラリンピック競技は楽しんで行うものではない。やはり勝ちにこだわる」と言ったことです。やはりどんな人でも戦う気持ちは一緒だということです。私も陸上をやっているので、その言葉が競技をする上で大切だと改めて気付かされました。３つ目はボランティアについてです。2012年のロンドンパラリンピックは史上最高の大会と言われているそうです。８万人の座席が毎日埋まるくらい人が来たそうです。ボランティアも数万人の応募に24万人の応募がさっ到したそうですが今のままでは2020年のパラリンピックでボランティアも観客も足りなくなってしまうかもしれないと言ってました。日本人のダメな所は、けんそんしてしまう所や英語力があまりないところだそうです。私はこの事実を聞いてぜひ稲附に入ったのだからボランティアの挑戦してみようと思いました。

生徒の感想 ④

今回、パラリンピック種目を実際にやったりお話を聞いたりして感じたことが３つあります。

１つ目は、種目を体験してみて、とても難しいと思ったことです。シッティングバレーボールを主に目の見えない状態で動くこともしました。足の不自由な人は座ったままバレーボールをするというのにおどろきました。いざやってみると、なかなか動けなくて、ボールがとれなかったり、目を閉じて音をたよりに歩くのは怖かったりしました。

２つ目は、障害を持つ人でも選手だということです。パラリンピックだからといって、楽しんでやっているというのは大きな間違いだったのだと思いました。また、音をたよりにする競技があるというところから、観衆が静まり返って一気に歓声が上がるということにとてもおどろきました。選手と観衆が一体となっているところに良いなと感じました。

３つ目は、東京オリンピックに何らかの形で参加したいと思ったことです。ちょうど高３で受験とかぶっているのですが、できたらボランティアをして色々なことを体験したいです。見に行くということも充分に参加することだと思うので、見に行きたいです。

2020ちばおもてなし隊セカンドステージコース３
「パラスポーツ体験」（千葉県ＪＲＣ西部地区メンバー協議会）に参加して（12月14日開催）

千葉県青少年赤十字西部地区指導者協議会事務局
千葉県立柏の葉高等学校教諭　　三井　康一

ＪＲＣ（青少年赤十字）は、赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる児童・生徒の育成に向け各学校に作られた組織で、千葉県西部地区では26の高等学校が加盟しています。その中で年２回実施する地区メンバー協議会ではさまざまな学習・交流を行っています。

平成28年12月14日（水）には中央学院高等学校を会場に、「パラリンピックスポーツの体験」を行いました。当日はＪＲＣメンバー 37名（７校）に加え、中央学院高校バレーボール部の生徒さんにも多数参加していただき、和やかな雰囲気の中とても充実した体験講座となり、参加者たちは楽しみながら多くのことを学んだようです。

体験後のアンケートに書かれた感想をいくつか紹介します。

○　パラリンピックの種目を初めて体験しました。シッティングバレーは普通のバレーボールと違い足が使えないためとても難しいものでしたが、障害のある人もない人も一緒に楽しむことのできるすばらしいスポーツだと思いました。ゴールボールも目隠しをしてボールをキャッチすることが難しく、隣の人に当たってしまうことが心配で自由に動くことができませんでした。目の見えない方々の不安な気持ちがよくわかりました。楽しく参加できてとても良かったです。

○　実際のパラリンピック種目を体験して、〝目が見えないなら音を聞いて〟〝足が使えないなら座ってやる〟など、少しやり方を変えるだけで普通の人と同じようにスポーツをすることができるのだと思いました。またこうした工夫をすれば、〝障害のある人とそうでない人も一緒にスポーツを楽しむことができる!!〟と思いました。だからこうしたスポーツをもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。

○　今回パラリンピック種目を体験してみて、テレビなどでは簡単そうに見えていたけど、実際にやってみるととても難しかったです。パラアスリートの方々のすばらしさを実感しました。また、これからは目の不自由な方や手足が不自由な方がいたら自分から声をかけて少しでも助けになれるようにしていきたいです。

○　パラリンピックについては今まで興味がなく、１度も見たことがありませんでした。今回初めてパラリンピック競技を体験して、オリンピックと同様に、選手も観客も楽しむことができる大会であるということを実感しました。競技のひとつひとつが工夫されていて、初心者の私でも楽しむことができました。オリンピックほどには知名度の高くないパラリンピックですが、多くの人に障害のある方々のさまざまな思いを知ってもらい、考えてもらうためのとてもいい機会だと思います。今回の経験を活かして、自分も2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピックのお手伝いができたらいいなと思いました。

2020ちばおもてなし隊　セカンドステージ　全体交流会　アンケートから
（昭和学院秀英中学・高校、千葉黎明高校、津田沼高校、幕張総合高校、千葉女子高校、東金高校）

Q　大学生、地域の人と話し合うことによって、アイデアにどんな意見や変化がありましたか？
また、それに対してどう感じましたか？

○　千葉県には自分が思っていたよりも多くの魅力があることを知ることができた
○　自分は外国人に興味を持ってもらえることを探していたが、興味を持ってもらえる方法を考えていけば良いとわかり、もっと考えてみようと思った
○　自分にはない発想がたくさん出てきて、とてもいい刺激が得られて楽しかった
○　この人すごいな、こんな考え方もあるのか、といった形で学ぶこともいっぱいあった
○　千葉県について、おもてなしをするには自分たちが学ばなければならないということに気づいた
○　自分の持っていないアイデアや考え方、また千葉県以外から来る方に自分が伝えられないという弱点が見つかったので、もっと千葉について知らなきゃなと思った
○　話が広がりすぎることもあったが、話をしているうちにパッと突然良い意見が出たりと、とても新しい討論になった
○　話し合う中で、地元の方々によるおもてなしをするという提案をした
○　出たアイデアはお客さんがとても喜んでいただけると感じた
○　自分の意見を言っても、拾ってくれたのでよかった
○　今は地元の人にしか知られていないような伝統的なお祭りのこともしれたことで、より具体的なアイデアになった
○　議題に対してまず自分たちからの視点、観光客からの視点と２つの論点で考える必要があり、バラバラな意見が出る中でも、共通して言える考えもあった
○　ここに来ている人は自分でやるという気持ちが強いが、やりたいと思っていない人が多い中、その人たちを動かすという点に触れていないと感じた
○　初めてオリパラ関連の話し合いに参加したが、みなさんのオリンピックへの意識の高さに驚いた
○　今までは現実的にできるかなと考えてしまい、アイデアがあまり膨らまなかったが、もっと視野を広げて考えて良いのだなと思った
○　ひまわりを千葉で育てている方がいたが、そのお話はとても参考になり、ディスカッションの主軸にもなった

Q　イベント前後でどのようにあなたの心境が変化しましたか？

○　2020に向けてやる気に満ち溢れている人がこんなにいるとは思わなかった
○　千葉の魅力を知って、勉強していこうかなと思った
○　2020年のオリンピックに関わりたいという気持ちが強くなった
○　今回は直接大会に関わる内容ではなかったため、去年の夏に提案したような最低限必要である内容も話し合って、自分たちにできることを探していきたい
○　最初は緊張していたけれど、グループワークはとても意見が出しやすく、有意義な時間を過ごせたので楽しい気持ちで終わることができた
○　オリンピックやパラリンピックのことだけだとしても、目的・課題がたくさんあると思い、このようなディスカッションはいいなと思った
○　オリンピックやパラリンピックについて、まず自分たちが学ぶことが１番大切であり、周りの人に発信する仕方にも工夫が必要だと思った
○　千葉の魅力を使ってたくさんの人をおもてなししたいと思っているが、今日、色々な意見を聞くことができ、より具体的になった
○　イベント前は、漠然としている内容（おもてなしなど）しかイベージができていなかったが、実際に話し合ってみると小さなことしかできなが、その小さなことが大きな変化に関わっていくと思った
○　元々自分は引っ込み思案で、自分から話すことが苦手だったが、こういうディスカッションを通して、自分から話すことが楽しいものなんだとわかってよかった
○　ディスカッションで大学生や他の高校生で話し合いをすることができて本当に良かった
○　学校がオリパラやバリアフリーについて何も取り組んでいないことへの危機感を覚えた
○　はじめは緊張していたが、次第に解け、より豊かなディスカッションになって良かった
○　残り３年という少ない時間の中で何ができるかを考えることで、オリンピックがすぐそこにという実感がより沸いた
○　こんなにも千葉の魅力を伝えるためにどうすればいいのか、ということを考えたことがなかったため、千葉県そして日本を発信することをこれからも考えていきたい
○　行動していくときに必要なこと、知ることなどをしっかり実行していくのが大切だと思った
○　2020年に向けて自分のやることが多くあるとわかったのが一番の変化
○　東京オリパラについて今まで興味はなかったが、ここまでいろんなことを考えたことはなかった
○　あと３年しかないオリンピックまでの日々の中で、自分にできることがあればやっていきたいとより一層思った
○　最初は嫌だと思っていたけれど、話していくうちに楽しくなってきた
○　交流会に参加できて良かったし、いい経験ができた
○　自分の意見を出すのは得意ではないが、共感してくれたり、それに対して新たな意見を加えてくれたりしてもらったため積極的に参加できた

写真集２　セカンドステージ活動の様子

全体交流会

参加者を激励する明石学長

参加者を激励する渡邊紫帆さん

グループ討議の様子

グループ討議の様子

討議結果の発表

討議結果の発表

討議結果の発表

司会進行を務めた幕張総合高校放送委員会生徒

平成28年度千葉県ボランティア参加促進事業
2020ちばおもてなし隊セカンドステージ
－育て！パラリンピックボランティア－

事　業　報　告　書

平成29年３月９日発行
千　葉　県
特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

全体交流会（平成29年１月14日）の参加者の皆さん